

裸身の女仙

野村胡堂

青空文庫

綱渡りの源吉が不思議な使い

「姐御」

「シツ、そんな乱暴な口を利いてはいけない」

「なるほど成程、今じゃ三千石取のお旗本のお部屋様だつけ、昔の積りつもじや罰ばちが当らア」

芸人風の若い男は、ツイと庭木戸を押し開けて植込の闇の中へ中腰に潜り込みました。

迎えたのは、二十一二の不思議な美しい女です。

武家風にしては、少し派手な明石縮あかしちぢみの浴衣ゆかた、洗い髪を無造作

に束ねて、右手の団扇うちわをバタバタと、蚊を追うともなく、話し声を紛らせます。不思議に美しい——と言ったのは、決して無責任な形容詞ではありません。月の光と、縁に吊つるした灯籠とうろうと、右左から照らされたこの女の顔は、全く、想像も及ばぬ不思議な美しさだったのです。首筋に束ねた髪は燃え立つように赤い上、大きく波打って、二つの瞳は碧海を切り取ったように碧く、上丈は五尺二三寸、肌の色は、桃色真珠に血を通わせたような、言いようの無い美しさに匂うのでした。

この一風変った美しさを、人によつては、不気味と見る人もあるでしょうが、この邸やしきの主人あるじ、安城郷太郎あんじょうこうたろうは、又なきものに寵愛して、本妻の亡き後は、一にもお鳥とり、二にもお鳥、お鳥でな

ければ、夜も日も明けぬ有様だったのも無理のないことです。

「そんな嫌な事を言っておくれでない——、それはそうと、あれほど此邸このの側へも寄らないようにと言つて置くのに、何うして潜り込んで来たのだえ、源吉げんきち」

お鳥はたしなめるように、斯う言い乍こらも、幾年振りかで逢つた、一座の弟太夫だゆう、あの綱渡りのうまい源吉を、世にもなつかしく眺めるのでした。

「姐御、すまねえ、俺だつてこんな、泥棒猫見みたいな恰好までして、人の家へ忍び込み度たくはねえが、二年振りで江戸へ歸つて来ると、矢も楯もたまらず姉御に逢い度くなつたんだよ」

源吉は、この二つばかり年上の美女を物悲しく見上げました。

小さい時から一座に育つて、恋というにしてはあまりに親し過ぎる二人は、手を取り合つて心ゆくばかり話すか、それとも、二匹の犬つころのように、存分に喧嘩でもし度いような、悩ましい衝動をどうすることも出来ませんでした。

「皆^みんな丈夫かい」

お鳥もツイ一足踏み出しました。張子の球にも鞆^{ぶらんこ}にも、手を組んで乗った源吉が、今でも親身の弟のように思えてならなかったのです。

「あ、親方も、お神^{かみ}さんも、一座の者は皆んな丈夫だよ。姐御が抜けてから、碌に目は出ないが、それでもまア、その日に困るようなことは無い。——ところで、三千石のお旗本のお部屋様にな

った姐御は幸せかい。親方は晩酌の度に、そればかり心配して居るよ」

「有^{ありがと}難う、まア、此通り暮して居るから、仕合せと言うものだろうよ、不足を言えば限^きりの無いことだから——」

「そうかね、その言葉の様子じゃ、あまり香^{かん}ばしい事も無^{そう}さ相だ、まア、辛抱しねえ」

「お前に意見を言われるようになったのかねえ」

「ヘッ、其^{その}辺は矢張^{やつぱ}り昔の姐御だ、——尤^{もっと}もお月様の光じゃ、はつきり判らねえが、美しいことも昔の通りらしいネ」

「何をつまらない」

「ところで姐御、ツイ二三日前、両国の小屋へ、変な人が訪ねて

来た」

「……………」

「五年越し、俺達の一座を尋ねて、日本国中を遍歴へめぐつたと言う若い浪人者だ。尤も、そう言つたところで、親の讐かたきを討つわけでも俺の綱渡りが見度いわけでも無い。手っ取り早く言えば姐御に逢つて、話し度いことがあるんだとさ」

「……………」

「おツ、ひどい蚊だ、すまねえが、庭石の上に腰を下して貰つて、その浪人者の話でえのを受うけもつ売り乍ら、一席やらかそう」

源吉は七三にからげた裾をおろして、脛から踵を包むように庭石の上に腰をかけました。その前にこれも中腰になったお鳥、縁

側の光から、源吉の姿を庇^{かば}うように、団扇^{うちわ}を動かして、無意識に蚊を追ひ払つて居ります。

「ね、源吉、そんな浪人の話より、私は皆んなと一^ひと眼逢い度いんだが、何^なんとかならないものかねえ」

「おっと、そんな贅^{ぜいたく}沢を言つちやいけねえ。一座とはすっかり手を切つた筈^{はず}の姐御だ。よしんば今日の物に困るたつて、のめめ顔を持つて来る親方じゃねえ、——それよりは今の浪人者だ、何^どうしても姐御に逢わずに居られないから、ここ十日の間に、折を見て、雑司ヶ谷^{ぞうしがや}の鬼子母神様へお詣りをして貰い度い。小日向^{こひなた}と雑司ヶ谷なら、遠いところでは無いし、御寵愛の籠の鳥でも、子宝を授けて貰い度さのお詣りとか何んとか、口実はどうでも出

来るだろう、と斯^こう言うのさ」

「――」

「――それでも疑念があるなら、斯^こう言つて貰い度い、そのお鳥殿とやらの、世にも不思議な素性が解つた――と、斯^こう言うんだ、大分變つてゐるじゃ無いか」

「それは、何とかして出られない事はないが、何^どんな武家なんだい」

「嘘^{いつわり}も偽^{いつわり}も、悪^{わる}巧^{たく}みもあるような人柄じゃねえ、名前は萩江鞍^{はぎえく}馬^{らま}、絵に描いたような好い男だよ」

「萩江――鞍馬――知らないねえ」

二人は近々と、何時^{いつ}の間にやら囁^{ささ}やき合う姿勢になります。

「不義者ッ」

不意に、恐ろしい一喝、縁側から怪鳥のように跳び降りたものがあります。

「あれッ、殿様」

「えッ、離せッ」

^{すが}縫り付くお鳥を蹴飛ばして、源吉を追って、庭木戸の外へ。

^{あいにく}

相憎の月夜、五六間先へ、一散に逃げて行く源吉の後姿を隠す物の隈くまもありません。

年頃まで裸で育った山の娘

お鳥は、その赤い毛と碧い眼が變つて居るように、世にも数奇すうきな運命もてあそに弄もばれた女だったのです。

物心付いたのは、碓氷峠うすいとうげの奥、めったに人も通わぬ炭焼小屋で、岩吉いわきちという、山猿のような男の世話になつてゐる時でした。

世話になつて居る——というのは本当で、お鳥自身は何処どこで生れたか知りませんが、兎とに角岩かく吉の子で無かつたことは事実で、二人は、全く顔形かたちが似ないばかりでなく、岩吉は、山人の間でも評判の醜い独り者で、女房というものを持つたことの無い男だったのです。

お鳥は、猿の子のように、一年の半分は裸体で育ちました。岩から岩へ、木から木へ、山の餌を獵とつて、山の獣達と一緒に何ん

の苦勞もなく生い立つたのですが、髪の毛が房々ふさふさと延び、双つふたの乳房が、こんもり盛もりあが上つて、四肢に美しい皮下脂肪が乗り始める頃から、身を切られるような、恐ろしい羞恥に悩まされ始めたのでした。

岩吉は、ろくに着物を着せてはくれませんでした。海藻わかめを綴つづつたような、恐ろしい檻ぼろ褌ふんどしが、二三枚無いことはありませんでした。が、五月になるとそれを剥がれて、陽の当るうちは、岩の上でも、藪の中でも、赤裸で暮らさなければならぬお鳥だったのです。

お鳥は時々谷川の水鏡を見て、次第に美しくなつて行く自分のからだ肢体と、山人達や、たまに里から来る人間と自分との間に、恐ろしい差さしちが違がいのあることを覚り始めました。赤い毛、碧い眼、円まる

い滑らかな顎、伸々のびのびした四肢、美しい皮膚など、岩吉はもとより、此辺で見かける人達とは、まるつきり違ったものです。

もう一つ、お鳥の悩みは、自分を育ててくれた岩吉の態度が近頃すっかり變つて了しまったことでした。五月から十月迄まで、陽のあるうちは、着物を着せてくれないのは昔からで、別に不思議も何にもありませんが、お鳥の行く先々へ、執念深く付き纏まとう岩吉の眼の色が、今まで経験したことも無い、不思議な光を帯びて来るのが、お鳥に取っては、何よりも我慢の出来ない圧迫でした。

「着物を着せておくれよう」お鳥は時々そんな事をせがみました
が、

「うんにや、ならねえ、若え者が今のうちから着物を着たら、冬

になったら、何うするだ」

岩吉の調子には、一縷いちるの妥協性ありません。

それでも、昼は大したことはありません、が、同じ小屋の中に眠る夜は、お鳥に取つては、たまらない嫌悪でした。本能的な不安の中にも、疲れと若さに誘われて、ウトウトと寝付くと、岩吉の毛むくじやらかな手が、お鳥の腕を押えて居たり、岩吉の髭ひげ面が、お鳥の頬とすれすれに、息と息とが絡み合つて居ることさえ稀では無かつたのです。

お鳥は驚いて飛起とびおきました、夜が明ける迄は一寸ちよつとも小屋の外へは出してくれません。何べんか、里へ逃げ出そうとしましたが、裸体では何うするどことも出来ず、それに岩吉は口癖のように、

「お前が里へ出たら、一ぺんに打ち殺されるぞ、間違つてもそんな気を起すな」

と言う言葉に脅やかされて、何辺か思い立つては、果し兼ねていたのです。

併し最後の時は来ました。ある夏の夜、岩吉の執拗な悪戯は、
とうとう
到頭、山の処女の恐怖を、腹の底から揺り覚しました。

お鳥はその時、十五か、精々十六だったのでしよう。我慢の
出来ない岩吉の腕から脱け出すと、漆のような闇の山路を、全く
当もなく駈けて出たのでした。

五十両の手切れでお鳥は旗本へ

その晩、信州路を廻つて、散々の不入に悩まされたかるわざ輕業の一
座が、安泊りに入る路用もなく、碓氷峠の出口に、ふるのぼり古ふる幟ぼりを天
幕にして、馴れた野宿をして居りました。

峠には、時々狼が出て、旅人を悩ました時代です。野宿の輕業
一座は、夜通し火を焚いて、かわ交るがわ交る番人を置きましたが夜中か
らあけがた暁方かけて、焚火を見張らされたのは、一座の花形で源吉と
いう綱渡りの少年でした。

ツイ、うとうととした眼を開いて、夜の明けるまで、もう一と
焚き——と立ち上ると、

「あッ」

眼の前へ、赤い毛をした、裸形の娘が、人懐かしそうに立っているではありませんか。

「親方、た、助けてッ」

二度目の少年の声を聞くと、親方の源太夫げんだゆうを始め、二三の屈強な男が、手廻りの得物を携えて飛出しました。

が、焚火の前に、しょんぼり立っているのは、妖怪変化でも山の狼でもなく、一糸も纏わぬ処女——神々こうこうしいばかりに美しいのが、碧い眼を据えて、物に驚く風情に、ジツと此方こちらを見詰めて居るのでした。

話せば、長くなりますが、——こうしてお鳥は、源太夫の一座に拾われ、言葉と、芸と、いろいろの智恵を仕込まれて、一年の

後には、一座の花形、鳥太夫と名乗って舞台に立って居たのでした。

それから三年経ちました。

ふとした事から、お鳥の異国的な美しさを見た、三千石取の旗本、安城郷太郎と言う中年の武家が妻を喪^{うし}なつたばかりの淋しさもあつたでしょう。恐ろしい熱心で、——お鳥を懇望したのです。

源太夫は根気よく断りました。「碓氷の山で育つて、礼儀作法も弁^{わきま}えず、武家奉公などは思いもよらない」と言う口実で、人橋を架けての望みを突つ返しましたが、「行儀作法はこちらで仕込む、見事一年と経たぬうちに、武家の家風を教えて見せる」という調子で、何んとしても諦めません。

結局は、刀で脅かされて、折から御難続きの源太夫に、手切れともなく五十両の金をやり、一切の縁と關係を断つことにして、安城郷太郎の妾めかけとして引取ひきとられたのでした。お鳥はその時十九、「此後、如何いかなる事があつても、出入はならんぞ、一座の者にも、よく申もうしつた 伝えて置け、道で逢つても挨拶をしてはならん」斯こう言う郷太郎の言葉に反そむいて、弟分の源吉が、久し振りに江戸へ帰つて来ると、浪人者——萩江鞍馬に頼まれた用事を口実に、昼のうちに、結び文を礫つぶてと一緒に投ほうり込んで、そぞろ歩きのお鳥に拾わせた上、夜になるのを待ち兼ねて、小日向の邸の中に潜り込んだのでした。

成敗は斯うと降り注ぐ唇の雨

「お鳥、来い」

だいにちぎか

大日坂に駈け登ったらしい安城郷太郎、ほのお焰のような息をお鳥に吹き掛けるとむんずと、手を捕つて庭口へ引入れました。

「あッ」

「驚くなお鳥、相手は盗賊として斬り、町役人に引渡したぞ、見度くば見て来るが宜い」よ

「……………」

「ところで、今度はお前の番だ、どんな成敗をしたものであろう、のぞみ望を言えッ」

郷太郎はお鳥の身体からだを突つ放すと、沓脱くつぬぎの上へ、ハタと蹴飛ばしました。

「殿様、お間違いなさいますな、あれは、あの男は、源吉でございます」

お鳥は起直おきなると、必死ひつしと、郷太郎の裾に絡み付きからました。

「何？ 源吉」

「ハイ、あの軽業一座の源吉が、久し振りで江戸へ帰つて、皆んなの代りに逢いに来てくれたので御座います」

「源吉なら、なお悪い、長く一緒に居ただけに、疑念も一としおと言うものだ。それに、あれほど言つて置いたでは無いか、源太夫を始め、一座の者と、往き来はならんと」

郷太郎もさすがに予想外のようにでしたが、源吉と聞いて怒りは少しも納まったわけではありません。

「可哀そうで御座います、殿様、源吉は何んにも存じません」
「黙れッ」

「……………」

「庭口から忍び込んで女と曝き交して居る者を潔白と言えるか、
第一、お前の心掛が悪い」

「ハイ」

「二年越行儀作法を仕込んで居るのに、まだ武家の家風を呑込めぬとは、何んとした白痴だ。たわけ裸体で碓氷の山の中で暮した時とは違う」

「……………」

郷太郎の舌は辛辣に動きますが、お鳥は沓脱の上に崩折くずおれて物も言いません。

「軽業の一座で、その赤い髪の中に銀色の角を植え、裸体になつて、鬼の真似まねをして居た其方そなたを、引取つてやったのは誰の恩だ」

「……………」

「せめて人がましい心構を覚えさせたさに、二年間の骨折で彼れか此れと仕込んだでは無いか、それに何んだ」

「……………」

「武家の妻も同様の其方そなたが、若い男を引入れて、庭の木蔭に囁き交すとは何事だ」

「……………」

四十男の嫉妬は、煮えた油のように執拗でした。少し不養生らしい蒼い顔が、憤怒と月の光に、物凄く硬張^{こわば}つて居りました。

「さア、成敗して取らせる、それへ直れ」

「殿様、それは、それはあんまりで御座います」

お鳥は漸^{ようや}く顔を上げました。此世のものとも思えぬ美しい顔が半面青白い月を浴びて、碧い眼がポロポロと泣いて居ります。

「何があんまりだ、お前のようなものを教え込もうと思ったのが間違いだ、山猿の子は矢張り山猿だ、それへ直れ」

邸の中は無人の境の如く誰も外へ出て止めようとする者はありません。主人の日頃の気象^{きしやう}を知り抜いて居る上、溺愛されるお

鳥に對して、蔽^{おお}うことの出来ない反感が、用人から端女^{はした}の末まで
行^{いきわた}亘^{わた}つて居る為でした。

「殿様」

「覺悟は宜いな」

郷太郎は二度太刀を振り冠^{かぶ}りましたが、紅い唇、白い喉、碧い
眼の、言いようもない魅惑的なお鳥の顔に逢うと、二度とも刀を
おろして、息を継ぎました。

「殿様」

「よしッ、お前の成敗は、外^{ほか}に術^{すべ}がある。来いッ」

刀をピシリと鞘に納めると、前屈みにお鳥の脇へ両手を入れて、
五尺三寸あまりの美女を、いとも軽々と抱き上げました。

不思議な弾性を包んだ、柔軟な身体からだが、郷太郎の腕の中にムズムズと動くと、

「不届な女だ」

お鳥の顔へ唇の雨を降らせて、郷太郎はサツと奥へ、女を抱いたまま消え込みました。

油絵の具で描いたお鳥其儘の姿

お鳥は十日待ちました。

その間、一寸も外へ出る暇が無かったのと、郷太郎の愛撫——、源吉を斬って以来、油を注いだように猛烈になった愛撫から、遁のが

れる途も無かつたのです。

それに、お鳥の様子——、赤い髪と、碧い眼が、天明年間の江戸の街には、あまりに目立って、頭巾を冠る期節でもなければ、うっかり外へも出られなかつたのでした。

若し、源吉が無事に逃げ延びたら、鬼子母神の茶店で待つと言う、若い浪人者とかの話は、そんなにお鳥を煩わさなかつたでしょう。が、命がけで、そんな事を教えてくれた源吉が、野良犬のように斬られて、悪名まで被せられたことを考えると、何んな事をして、鬼子母神で待つて居るといふ浪人者に逢つて五年の間、自分を捜し廻つたという用事や、自分の素性の事を聞かずには居られないような心持になつて居るのでした。

暑い日の昼下りから、紺色の日傘に、赤い髪を隠したお鳥はお石^{いし}という腹心の下女を一人^っ伴れて、雑司ヶ谷の鬼子母神の境内へ入って来ました。

「あ、御新造様、あれは何んで御座いましょう」

お石の頓狂な声に驚かされて、石畳の上にお鳥は立ち止ります。

「あッ」お石に指さされて、一と目、お鳥も立ち^{すく}竦みました。

右手の茶店、名物芋団子やら、焼鳥やらを食わせる家の、奉納の手拭の幾本かブラ下ったあたりに二尺に一尺五六寸の、今まで見たことも無い、不思議な絵がブラ下って居るのです。

油絵の具で描いて、唐紙模様を彫んだ広い縁の額に入れた絵——それだけでも充分変って居るのに描かれた絵というのは、赤い

髪、碧い眼、鼻が高く、顎の円い、お鳥そっくりの女、羽根のような白い着物を着て、紅い唇が、ほのかに微笑に綻びかけて居る様子まで、お鳥そのままの美しい姿だったのです。

「これは、御新造様の絵姿じや御座いませんか、何うしてこんなところに——」

お石はあまりの事に眼を丸くして、釘付けになつて了しまいました。油絵などは、切支丹きりしたんの踏絵より外には見ることの無い時代、茶店の店先に、鏡に映したような、お鳥の肖像があつたのですから、これに驚かなければ何うどかして居ります。

「石、其処そこの店で訊いておくれ、これは何うどした絵で御座いましょうか——つて」

「氣味が悪う御座いますネ、御新造様」

「それじゃ私が訊いて見よう」

「あれ、そんな積りじや御座いません」

お石が入つて訊くまでもありませんでした。お鳥の変つた顔形を見ると、茶店の婆アは心得顔に、

「御新造様、お鳥様と仰おつしやいましたな。萩江様が十日も前から毎日毎日お待ち兼ねで御座います」と、奥を指さします。

「お石、ほんの暫しばらく此處ここで待つておくれ、誰か知つてゐる人が見えたらそつと教えてくれるように」

「宜よろしゅう御座いますとも、御新造様」

心得顔なお石を店に残して、お鳥は茶店の老女の案内するまま、

薄暗い別間へ通りました。

ようや
「漸つとお見えになりました、旦那様」

「お、それは有難い」

婆アの声につれて、窓際から身を起したのは、二十八九の立派な武士、越後上布に、白博多の帯、一刀を提げて起つと、なげし長押にまげ髻の刷毛先が届きそうな堂々たる体躯で、浅黒い顔は日焦けひやのせいでしよう、にっこりすると淋しさのうちにも、ふる顫いつき度いような愛嬌があります。

「さア、御新造様、お通り下さいまし、旦那様は今日で十日、明けの六つから、暮れの六つまで、この暑いのにこんな場所で、根気よくお待ちになりました。他から拝見しておいたわしいようで、

何辺かお諦めなさいますように申上げましたが、十日目にはきつと来る、と仰しやつて、一刻も此処ここをお動きになりません。あの通りお痩せになつて」

「まア、宜い——、お鳥殿お通り下さい。拙者は萩江と申す浪人者、斯か様な場所へ御案内申すのが、道に外れて居ることも、御迷惑なことも万々承知し乍ら、何んとしても、一言申上げ度いことがあつて、諦め兼ねました」

「……………」

お鳥は思案に暮れて、部屋の入口に蹲うずくまりました。入ったものか、逃げ帰ったものか、全く分別が付かなかつたのです。

が、四角几帳面な浪人の言葉と、その端麗な顔を見ると、どん

な警戒も、ほぐれるように解けて了^{しま}つて、側へ行つて聞くだけの事を聞いてしまいいと言つた、わけも無い衝動に駆られるのでした。

「お鳥殿、何より先に、父上の伝言を申上げ度い——」

「私の？」

「左様、お鳥殿の父上は、藁のうちから捨てたことを、どんなに後悔して居ることか——、唯^{ただいま}今、店先で見られた絵姿をたよりに、万に一つ拙者の手で探し当てたなら、直^すぐ様知らせてくれるようにとくれぐれも仰^{おつ}しやつたが」

「私の父親は、何処^{どこ}の、何んと言う者で御座いましょう？」

「それが、お鳥殿、風の便りに聞くと、一年ばかり前に亡くなら

れたとの事じゃ」

「えッ」お鳥も妙な惑乱を感じます、が、凝^{じっ}ところえて、浪人の顔——妙に思い詰めた真剣な顔を仰ぎました。

「今となつては、お鳥殿の身の秘密を知る者は、広い世界にも拙者より外には無い。礼儀にも道理にも無いことではあるが、源吉に頼んで、あの言^{こと}伝^づを申し上げたのは、斯^こうしたわけであつた」

「その秘密とやら仰しやるのは何んで御座いましょう、——あの店先の絵姿は誰で御座いましょう、私で無いことは解り切つて居りますが、若しや——」

お鳥は息を吞みました。若しや——それは自分の母親か、又は姉だったかも知れないのです。

「それを申上度き、それにお鳥殿に逢い度いばかりに、五年の間、岩吉という木樵きこりを尋ね、源太夫という軽業師を尋ねて、中仙道から、北陸、東海道は申すに及ばず、京へも大阪へも、奥州までも経廻りました」

「……………」

「いや、手前の骨折などを吹聴する積りは毛頭ない——が、話の序ついでに、思わぬ愚痴になりました。旗本、安城家へお入りと聴きましたが、斯様な話を正面から持つて行つても、誰も信じてくれそうは無く、それに、安城殿はこの外潔癖けつへつだそうで、源吉を頼んでやるとあの始末だ」

お鳥も暗然としました。弟弟子の源吉の死が、またくすくす撥はくるよう

涙を誘います。

「萩江様、何んと申上げて宜しいやら、いろいろ御骨折、有難う御座います。そうまでして下さる貴方様は何んなお方で入らっしゃいましょう、せめて御身分をお明かし下さいまし」

「西国の浪人、萩江鞍馬、それ以上は申上げようも無い。軽井沢でお鳥殿の父上にお目にかかり、此店先に掛けてあつた絵姿を手に入れて、拙者は斯うするより外には工夫も無かつたのだ。お笑い下さい。武芸の修業でもあることか、一婦人を尋ねて、五年越日本中を遊歴した私は、武士の端くれを汚すさえ後ろめ度い――、何事も、前世の約束事であろう、お鳥殿」

鞍馬は斯う言つて、端麗な顔を俯向けました。

言うことは筋も意味ありませんが、美しい絵姿に魅入られて、同じ顔形の人を探そうとした、果敢なくも熱烈な恋心は、お鳥の胸にも犇々^{ひしひし}と喰い入ります。

「何んと申上げて宜いのやら、私には解りません。それにつけても亡くなった私の父親の名と、私の素性を、どうぞお教え下さいまし」

「他聞^{はばか}を憚る事、暫らくお待ち下さい」鞍馬は立ち上つて、簾^{すだれ}の外、夕陽にキラキラする石畳の上を見ましたが、ハツとした様子でお鳥を顧みました。

続いて店からお石の声、

「御新造様、殿様が入らっしゃいます」

「あッ」お鳥も驚いて、遽にわかに店口に飛出しました。

この時石畳を踏んで、鬼子母神の境内へ入って来たのは、安城郷太郎の忿ふんぷん々たる姿。

その後には日頃お石と仲の悪い下男しかぞうの鹿造が心得顔にニヤリニヤリと従って居るのです。

山の女は反逆する

「女、何処どこを歩いて来た」

邸へ帰って縁側に掛けたままの安城郷太郎、振り返ってお鳥に日本一の苦い顔を見せます。

「ハイ」

「ハイでは無い、鬼子母神の茶店に居たのは、ありや何^なんだ」

「……………」

「どんなに作法や、人の道を仕込んでも、お前は矢張り山猿の子だ、今度は許さんぞ」

「……………」

「石は今日のうちに暇を取らせる、お前は、お前は」

郷太郎は考え込みました。この素晴らしい玩^{おもちゃ}具を壊さずに、

存分に思い知らせる仕置は無いものか——を思い煩^{わづ}って居るので
す。

「殿様、あのお武家は、私の父親の言伝を持って入らっしやいま

した。決して、決して」

「黙れ、お前の父様は碓氷峠の猿だ、——そんな甘手に乗る俺と
思ふか」

足を挙げてハタと蹴ると、お鳥の身体からだは庭へ、毬の如く転げ落ちたのかと思うと大違い、

「ホ、ホ、ホ、殿様、御冗談が過ぎます」

縁側の上から、素晴らしい嬌笑を浴せるのはお鳥で、庭の芝生に尻餅を突いたのは、外ならぬ主人の郷太郎自身だった。

「無礼な女奴めツ、其処そこ動くなツ」

郷太郎は飛起きると、縁側の一刀を掴みに行きましたが、お鳥は早くも飛付いて、座敷の中へパツと投げ込みました。

「殿様、作法の仕込みのと仰しやいますが、それが、三千石の大きな身たしなの躰みでいらつしやいましょうか。少し静かに、私の言う事も聞いて下さいまし」

「何を申すッ」

郷太郎は、女の言葉を耳にも掛けませんでした。

刀を取り上げられたムシヤクシヤも手伝つて、大手を拡げて、ガバと組くみ付くのを、かいくぐったお鳥の双腕は、もう一度郷太郎の胸をドンと突くと、三千石の御大身ともあろうものが、他愛もなくよろけて庭石の上へ、したたかに尻餅を突いて了しまったのです。

「ホホホホ、まあ弱い殿様」

「えッ、己れッ」

郷太郎は煮えこぼれそうに腹を立てましたが、何^なんとしても腰が切れません。

お鳥は十五六まで、碓氷の山奥に育つて、猿や鹿を相手に、木から木へ、岩から岩へと飛んで歩いた上に、軽業の一座に交つて、三年の間身体^{からだ}を練つた女です。

^{うちものわざ}打物業にさえならなければ、妾狂いに浮身をやつす安城郷太郎などの手に負える女ではありません。

「殿様、このお鳥を馬鹿に遊ぶのは宜しゅう御座います。山猿と一緒に育つたことも、銀の角を生やして、裸^{はだか}体になつて飛廻つたことも嘘とは申しません、が、何んの罪もない源吉を殺したり、私の親の悪口を仰しやつては我慢がなりません」

「何？」

お鳥の言葉は、切々として肺腑に喰い入りますが、郷太郎は起き上られぬまま、負け惜みの眼ばかり光らせます。

「私は言わば金で売られた身体からだで、三代相恩の家来でも、殿様の奥方でも御座いません。二年越しのお仕込みはお仕込みとして、この上我慢がなりましょうか」

「……………」

「私はもうお仕込を頂かなくとも宜しゅう御座います。此場から御暇を頂きます、殿様、そんな顔を遊ばすものでは御座いません」

「無礼者ッ」

「女から愛憎あいそ尽かしをすると、下々の者は、もう少し潔いさぎよい事を

申します。殿様、もうお目にはかかりません」

「待て、待て女」

安城郷太郎の声を背後に聞いて、お鳥は立ち上りました。

「こんな窮屈なところに居るより、私は矢張り碓氷峠へ帰って、
はだか裸体で暮らしましょう。お友達だった猿や鹿が、まだ何匹かは生きて居ましょう」

涙ぐましい声になって、つと立ち上ると、何時いつの間忍び寄ったか、後からガバと組付いたのは下男の鹿造、

「何をするのさ、いやらしい」

身を沈ませて、大の男にもんどり打たせると、

「えッ、神妙にせえ」

前から用人、六尺の手槍をピタリと付けます。

駕籠に乗せて女を信濃路へ

「お女中、何処^{どこ}へ行かれる」

「あッ、旦那様、大変なことになりました」

お石は往来に立ったまま、手離しで泣き出しました。呼び止めたのはこの暑いのに、深編笠で面体を隠した武士、言うまでもなくそれは、萩江鞍馬の世を忍ぶ姿でしょう。

「御新造様は、殿様のお怒りに触れて、浅ましく縛られたまま納^な戸^{んど}に投げ込まれて、窮命中で御座います」

「えッ」

「私は昨日のうちに休暇が出ましたが、朋輩衆の取なしで、一日だけ延して頂き唯今宿元へ下るところで御座います。私はどうなつても構いませんが、御新造様がお可哀そうで——」

「これこれ、往来で泣いては人立ちがする、ところであの、お鳥殿を救い出す工夫はあるまいか」

「飛とんでもないこと——、御新造様は今晚、御領地の信州へ、通かごし駕籠つで伴れて行かれ、一生其処そこへ押籠おしこめられるので御座います」

「えッ、それは本当か」

「嘘なら宜しゅう御座いますが、旦那様」

お石は四方あたり構わず泣き出してしまいました。音羽の森に夕づく陽

が、この一克者らしい娘の襟に射して、妙に涙をそそる情景です。
鞍馬は、何程かのお鳥ちようもく 目を娘に握らせて、其儘そのまま宿に飛んで帰りました。

慣れた旅支度と言っても夕景まで手一杯に急いで、小日向の安城邸に駆け付けたのはもう戌刻いっつ（八時）少し前、夏の日もすっかり暮れ切つて、忍びの旅立ちには丁度ちようど宜い頃合でした。やがて、門を出て来たのを見ると、駕籠が二挺、一つはお鳥の捕われの姿で、一つは、主人の郷太郎でしょう。それに用人、仲間、草履取ぞうりまで一行八人、さすがに大身だけ警固に一分の隙があらうとも思われません。

特に用人 おばたとうざぶろう 小畑藤三郎は、中年者乍ら槍の名人、道中は長物を

憚つて、袋のままの手槍を毘沙門びしゃもん突きに、大きい眼を四方に配ります。

門を出ると直ぐ――。

「小畑、先程も申す通り、万一くせもの曲者に出逢つたら、其方は先まず第一にその槍で、女の駕籠を刺すのだ。間違つても、曲者に向つてはならぬぞ」

先の駕籠から斯こう声を掛けたのは、言うまでもなく安城郷太郎、お鳥を狙う者のあるのに、薄々気が付いたのでしよう。

萩江鞍馬は、分別もなく、一行の後を追いました。

泊りを重ねて、碓氷へかかったのは、それから四日目、安城郷太郎の一行は、日の暮れたのも構わず、峠道へ――、傍目も振ら

ずにかかりました。

「近頃、峠へ千足狼が出るぞ、危ないことだ、泊って行かつしやい」

そう言ってくれる里人の注意を聞流ききなして、何処どこかと言えば臆病な安城郷太郎が、夜の山道へ駕籠を入れたのは仔細あり氣です。

千足狼の餌に裸女を山へ

「女、お前の故郷に来たぞ、降りろ」

郷太郎は駕籠からお鳥を引出させました。

「殿様」

お鳥は思わず声を立てました。少しやつれては居るが、相変らずの美しさ、

「お前の顔を見ると、未練なようだが、俺は斬られなくなる。そこで、領地へ用事で帰る序に、お前を故郷へ帰そうと思って伴れて来たのだ」

「……………」

郷太郎の残虐な目論見が次第に判ったものか、お鳥はぞつと身を顫わせます。

「お前は、此碓氷峠で育った相だ、しかも裸体で——」

「……………」

「裸体で此山から出たお前を、裸体で此山へ帰す——、俺の仕事

はそれで済む。その上、里で聴くと近頃此峠へ千足狼が出るそう
だ。それも、お前の昔馴染^{なじみ}染だろう。夜と共に吠え明かせ、ハッハ
ッハッハッ

苦い笑が、郷太郎の頬を痙攣^{けいれん}させて、洞^{うつ}ろな声が、夜の林に力
ラカラと木精^{こだま}します。

「えッ、畜生ッ」お鳥は菌を食いしぼりましたが、此処^{ここ}まで運ん
だ郷太郎の悪戯^{いたづら}を、思い止まらせることなどは出来そうもありま
せん。

「何んか、遠くの方で、変な声がするようだ。狼に出られては迷
惑だ。急げ鹿造」

「へエ」

鹿造は、お鳥を引立てると、手近の立樹の幹へキリキリと縛りました。

「それでよし、サア、引揚げろ」

そう言い乍ら郷太郎は駕籠へ入ると、もう一度振り返って、

「お鳥、故郷の月は格別だろう、お前の友達の吠える声も次第に近くなつたぞ」

捨て捨ぜりふを残すと、駕籠を促して里の方へ、一散に駆け降ります。

それから狼の大群の近づくまで、ほんの四半刻もかかりませんでした。

夜空に籠った陰惨な喰りに、お鳥はハツと首を挙げると、縛ら

れた大樹を繞めぐつて幾百の光り。

それは、お鳥の匂いを嗅いで集つた、千足狼の血に渴く眼だつたのです。

「……………」お鳥は凝じつと唇を噛みました。山で育つたお鳥はこの悪獸の貪どんらん婪な食慾と、執拗極まる性質を知り過ぎるほど知つて居たのです。

「……………」

お鳥は黙つて、八方に眼を配りました。縛いましめさえ脱とけば、逃れる道もあるでしょうが、何どんなに意地悪く縛つたものか、あせればあせるほど縄目が喰い込んで、月の光の下に、豊満な肉塊が、ただピチピチと蠢うごめくばかりです。

そのうちに、四方から囲んだ狼の壁は、五寸ずつ一尺ずつ輪を狭めて、一番先に立った灰色の親狼は、お鳥の目の先から三間ばかり、火のような眼をキラと光らせて、物を狙い撃つ恰好に、力ツと赤い口を開きました。

続いて、幾十、幾百の悪獣は、圧倒的な、いやらしい唸うなりの合唱を挙げて、四方から、恐ろしい力で圧倒します。

「た、助けて——」

お鳥は、初めて悲鳴をあげました。

「萩江様——、鞍、鞍馬様——」

もと素より萩江鞍馬が、其辺に居ると思つたわけではありませんが、五年間自分を尋ねてくれたと言う純情的な武士の名が絶望的なお

鳥の唇へ、フツと蘇返よみがえったのです。

それと同時にした。

真つ先の狼がサツと跳んでお鳥の肩へ、

「あッ」

その時遅く、礫のように飛んで来た一人の武士、狼の首筋をサツと斬り払うと、お鳥を後ろに庇って身構えました。

「お鳥殿、もう大丈夫」

「アッ、萩江様」

お鳥は夢のような心持で、救いの神の若い武士を見上げました。

「お鳥殿、危いことであつた」

そう言い乍ら萩江鞍馬は、狼の大群の中へ、刀を舞わしてサツ

と飛込みました。又二三疋は斬られた様子、悪獣のたじろぐ隙に、お鳥の縄を切り解いた鞍馬は手を取って側の大木へ――。

祖先の血が通うムリロの名画

木の上へ、お互の身体を梯子からだはしごにして登ろうとした千匹狼は、鞍馬の為に、何十匹斬られたかわかりません。

悪闘の一刻悪獣の群もさすがに少し身を引いて、遠巻きに樹上の二人を見上げました。

鞍馬とお鳥は、それでも、いくらかずつ落付おちつきを取返とりかえして、やがて、平静な心持で話し会あうようになる、何より先に、お鳥

の豊満な裸体、月の光にさらされて、ほんのり霞かすむような美しい身体からだが気になります。

「気持が悪くなかったら——」

萩江は振り分けの中から、着換の単衣ひとえを出して、そつと、その肩へ掛けてやりました。

「……………」黙って俯向くお鳥の目には、もう涙さえ浮んで居ります。

「お鳥殿、いつぞやは、申上げる程のことも申上げなかった。——狼は急に飛び付きもすまい、此処ここでお話いたそうか」

「どうぞ、萩江様」お鳥は鞍馬へ差し寄るように、委ね切った心持で、見上げました。

「五年前——、祿を離れて、軽井沢の獵師、三五郎さんごろうと言う者の家に厄介になつて居る時、フトした事から、あの絵姿を見付けたのが始まり、恥かしい事だが、何うしても忘れられなかつた——」

萩江は斯こう言う調子で語り進みました。獵師三五郎に聞くとそれは百年も前から家に伝わったもので、スペイン国のムリロと言う名人の描いたもの、ポルトガルの船乗りが、難破して清水港に着いた時持つて来たのだということです。

ポルトガルの船乗りは間もなく死んでしまいました。が、その種は日本に残つて、三五郎の家には三代に一人位、赤毛碧眼の子供が生れることがあります。今で言う間歇かんけつ遺伝ですが、当時はそれを惧おそれ憚はつて、三五郎の親の代に軽井沢に引込み、山狩りを

生業に細々と暮して居りましたが、何んの因果か、三五郎の女房も、異人の上陸と、切支丹禁制のやかましい時も時、人交りもならぬ紅毛碧眼の女の子を産んで了^{しま}ったのでした。

女房が産後の肥立ちが悪くて死んだ後、この異形の子を育てる氣力もなく、三五郎は心を鬼に碓氷峠に捨てたのです。萩江鞍馬が三五郎の家へ行つたのは、それから十何年目、ふと見せられた船乗りの母の若い姿を描いたという、油絵の美しさに魅せられて、それとそっくり同じであつたという、三五郎の娘の行方を探し出そうと決心したのでした。

炭焼きの岩吉が十六まで育てたことはすぐわかりましたが、輕業小屋に逃げ込んでから先が判らない為に、三五郎から申受けた

油絵を抱いて、五年越し、鞍馬は見ぬ恋にあこがれの旅を続けた末、フトしたことから、江戸で一座にめぐり逢い、お鳥は、旗本安城郷太郎の妾になって居ることまで突き止めたのは、ツイ半月前のことだったのです。

「斯^こう言うわけだ、お鳥殿、その美しさに、ポルトガル国の船乗りの血を引いて居る為、いろいろの禍^{わざわい}が後からあとと起つたのであろう。——併し、もう大丈夫、及ばず乍ら、この萩江鞍馬がお力になって、山の中から、街の中から、好みの場所に、安穩に送らせて進ぜよう、お鳥殿」

お鳥は、あまりの事に、暫らくは言葉もありませんでした。が、「有難う御座いました。五年間もお探しなすつた上、危い命まで

お助け下さって、お礼の申上げようも御座いません、が、私のよ
うな者が長らえては、反^{かえ}つて諸方に御迷惑、私もまた因果が恐ろ
しゅう御座います。さらばで御座います、萩江様——」

「あッ」お鳥は身を跳^{おど}らして、再び寄せた、狼の大群の上へ、自
分から身を投じようと思いました。が、これも危ういところで、鞍
馬に抱き止められました。

「萩江様、どうぞ、殺して下さいまし」

「いや、そんな事はならぬ」

二人は争う弾みに、足を踏み滑らして、もう一度落ちかけまし
たが、辛くも萩江鞍馬の手が、お鳥の全体重を留めて、小さい枝
にブラ下りました。

「お鳥殿、たつて死のうと言われるなら、拙者も一緒に、——手を離そうか」

「いえいえ、それはなりません、助かりましょう。私も助かります」

咆哮する悪獣の大群の顎から僅か一尺のところで助かつて、二人は漸く梢に還りました。

何時ともなく、東は白んだ。涙ぐましい心持で、二人は犇と抱き合つて居たのです。旧幕時代に時々赤毛、碧眼の人を見かけたのは、萩江鞍馬とお鳥の子孫では無かつたでしょうか、併し、それも今は昔の事です。

青空文庫情報

底本：「野村胡堂伝奇幻想小説集成」作品社

2009（平成21）年6月30日第1刷発行

底本の親本：「百唇の譜」東方社

1951（昭和26）年2月

初出：「朝日」

1932（昭和7）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2015年5月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

裸身の女仙

野村胡堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>